



幼虫さん

「あんなガリガリが部長って」

顧問が立ち去った後のテニスコートの端に吐き捨てられた、誰かの呟きを私は聞き逃しませんでした。ついさつき顧問から発表がありましたから「部長」は間違いなく私です。

その後に続く言葉が「最高」や「嬉しい」であろうと、あまりいい意味を持ちません。空気が、というものがあれば言葉はそれまででいいのです。大抵の人はその空気感を理解しているため、「って」と発言を切ったところで、そのまま人を傷つける凶器になりうることも同じく理解しているのでしょうが、その切りつけが顧問による解散の合図で部員が散り始めた瞬間である公衆の面前で行われたのも、発言の主が「この発言は共感されるであろう」という確信があつたからでしょう。「あんなガリガリが部長って」は発言された時点で、公の共通認識へとすり替わっていくのです。



けれど私は誰からこぼれ出たかも分からないそれを聞いて、ひどい安心感を覚えます。「普通」だと何も言われないので確認のしようがないのですが、「ガリガリ」までいくと周りがこしょこしょと教えてくださいます。よかった私は太っていないのだ、と。それでやっと私は自分自身に言い聞かせてやることができます。

弱小テニス部のガリガリ部長になった私は、軽い気分で自宅のドアを開けました。いつものように、甘じょっぱい香りがほのかに鼻をつきます。アロマやお香をたいているのでありません。そういう、家なのです。

私の家にはまるまるつと太った幼虫が二匹、いらつしゃいます。餌はその都度、安売りしているスナック菓子と「ダイエット」と丸ゴシック体で書かれた段ボールで送られてくる怪しい烏龍茶です。

今日みたく部活帰りなどで「ただいま」と声をかければ「おかえり」と返事をしてくれ



ますが、幼虫たちは常に何かを貪り食っています。

家の体重計は三人まで別々に記録をつけてくれるものが脱衣所を出てすぐ左に置かれております。私を記録した履歴は、全体を見れば右肩下がりではあるものの、日々、増えたり減ったりの微妙な更新を重ねているのに対し、残りの稼働している二つは八十キロと九十キロを超えたきり息をしていません。前にいちど、健康診断を受けるように勧めてはみたのですが、軽く笑って流されました。

「さと、あんた今日も夕飯たべないん？ そんなんじゃ部活もできんでしょうが」

リビングへ入ると幼虫の片方が言いました。ラインで「夕飯いらない」と送った返事を対面でしてくれたのです。文面での返事はスタンプ一個だったのに奥ゆかしい幼虫です。

そんな幼虫の右手にはポテトチップスがつままれています。それに対し「前も食べてなかった？」と指摘すると「前のはバター醤油味」と投げやりに言われてしまいました。

「いつも朝に食べてるから大丈夫」私は穏やかに言います。なにも、幼虫たちのことが嫌



いなわけではないのです。「いま食べちゃうと戻しちゃうから」ずっと前から胃のあたりにずっしりと感じている重さを意識しました。

「そおう、ダイエツトしてるんじゃないでしょうね」

「ちがうよ、なんか本当に。気持ち悪くなっちゃうんだってば」

そう言えばつまらなさそうに眉を上げる幼虫に、私は慌ててフオローを入れました。

「あ。ご飯が不味いわけじゃないからね」

けれど幼虫が気にしているのはそこではないそうで、「食という至高を放棄するなんて信じられない」とでも言いたげな風でした。気を使ってしまった私が急に馬鹿馬鹿しくなります。

「ほら夕飯いらないならコレ食べて」と差し出されたポテトチップスに、うわ、と思いつつも「何味？」と聞いてみると、幼虫はパッケージを確認した後「ポップコーン味」と私に差し出していたそれを頬張りながら答えてくれました。ポップコーン味だなんて覚え



やすいことこの上ないのに、自分が口に入れているものすらろくに理解できていないのです、この幼虫は。

「中学ん頃はそんなじゃなかったのに。ストレスとか抱えてるん違うだろうねえ」発言の息継ぎの度に、ポップコーン味が咀嚼される音がします。

「貪り」によって心配の言葉が持つ尊さが薄れてしまうだなんて、学校では教えてくれないので幼虫が分からなくつても平気です。そういうことにしました。「空気」は学校で教わらなくたってみんな分かっています、幼虫はきつと、空気さえ分からないのですから。

「抱えてないよお、大丈夫って」

私も、「つて」です。あとに続く言葉は知りません。空気で伝わって欲しくないなとも思います。けれど伝わった場合に幼虫が傷つけられる姿を想像して、それもいいかも。と思ってしまう醜い私を私は知っています。その醜さが、傷によってやたらめったらに食べ



過ぎてしまうのをやめるのを期待しているのか、ただ傷つけたいのかは、どちらか考えてみるとおそらく両方です。総合して私は醜いのであります。

「部長に選ばれたんでしょう？ そんなら頑張らんと」

「そうだねえ」

私は幼虫の激励に空返事で答えます。地区大会ですら初戦敗退ばかりで顧問はテニス未経験、だからと言って外部コーチもおらず、もう卒業してしまう先輩に教えてもらって伝言ゲームのように息を繋いでいる部の部長にさせられたからって、これ以上に私が頑張ったところで何があるのでしょうか。

それに、食べないよりは食べる方が健康な上にエネルギーになる。とか、十代の食生活は今後に影響してくる。とかを分からないほど私は馬鹿ではありません。けれど食べすぎてしまう幼虫がいる私の家で私が暮らしている限り、「食べる」を前にしてしまうと私は恐ろしくなつて、食道が胃の目前で塞がってしまったているんじゃないかと思えるような、



きもちわるさがあるのです。「シャワー浴びてくる」私はそう言つて、幼虫から逃げるようにして風呂場に向かいました。そんな部活でも動けば汗をかきます。その汗を、洗い流さなければいけません。

脱衣所で汗ばんだ服を脱ぐと、薄くて生命力のない体になります。鏡越しにアバラがハッキリと浮き出ているのが見えました。肩のまわりも肉がないため胸との間にはゆるやかな窪みがあります。股関節のあたりでは、大腿骨がウエストから大きく飛び出て丘のようになっており、アルプスの山岳を想起させました。横を向けばアバラが内臓をいかに守っているのかが分かるのですが、ウエストにかけての急な傾斜がまるでピンと張ったネットのようです。

「どうやったらあんなに太れるんだろう」

そう独り言を吐き出してみたはいいものの、答えは明白で、代謝がいいわけじゃないの



に食べても動かないから。ただ、それだけです。

服を脱ぐと自分の体がひとまわり小さくなったような気がします。まだ温度が上がりきっていない浴室のひんやりとした空気がシンと体に入ってきました。体を洗おうと全身をボディタオルでなぞるのですが、普段から食べないと筋肉のつき方もまあ悪く、手首やウエストを簡単に掴んだりつまんだりできてしまうと、簡単に持ち上げられそうだなと自分で自分に思います。そしてさらに掴む指先を見て、「細いな」と、先ほどポテトチップスを差し出された指先を思い出しながら感動するのです。

自分の体を気にしてしまえば、少し前まで交際していた恋人が「女はちよつとポツチャリしていた方がモテるんだから」と、言ってきたのを思い出して、内心ムカつきます。世のモデル体型の人たちが、私のように不健康な痩せ方をしているのではなく経済力と時間をつぎ込んだ裕福な努力をしているのを私は知っています。私が、それに並ぼうとしてダイエットしているためにこの体型であると思い込んでいる点や、私が人と交際をしてなお



「モテ」を気にしている点など、どうしてこんな人と付き合ってしまったのかと後悔してしまうようなことばかり思い出してしまつて、どうしようもありません。

そういうのは、「食欲」の「食」がただ「性」に変わったただけなような気がしてならないのです。もし仮に「ガリガリ」から「普通」になった日がこの先あらわれたつて、そういう欲の目を周りから向けられてしまうのも、私はきつと耐えられないのです。……記憶や過去を洗い流したくて、熱いシャワーを頭から流しました。

シャワーから上がると、もう夕食が始まっていました。私のいない食卓でも机の上は賑やかです。今日は脂ぎつたミニピザが中央に三枚ほど置かれております。サイドには山盛りのフライドポテトと添えるような唐揚げと、「ゼロカロリー」のコーラ。それらを挟んで二匹の幼虫が着席しています。さらに冷蔵庫にはデザートのおはぎが入っていると教えてくれました。この中じゃコーラがいちばんカロリーが低いでしょうに、そのカロリーを



ゼロにしたって意味があるのでしょいか。

「さとはまた夕飯食べないのか。いつかい、病院とか行つたほうがいいんじゃないのか」
さつきは居なかつた幼虫が言いました。言いながら、「食べ過ぎないようにミニにしよ
うね」と言われながら買われたであろうピザを頬張り、コーラで流しこんでいました。ミ
ニピザ三枚よりも通常ピザ二枚のほうが量が少なそうなサイズなのですが、それを指摘し
たって「そんなことない」と返されるだけです。

「病院はお互い様だよ、いま体重なんキロ？」

私が言うのと、幼虫は「なんキロ？」については無視を決め込み、「これ飲んでるから大
丈夫」と、コーラを指さしました。いつから「ゼロカロリー」は「痩せる魔法」にでもな
つたのでしょうか。

「大丈夫じゃないでしょ、食べるメニュー、気にしたほうがいいんじゃない？」

幼虫はスイカのような腹を叩いて豪快に笑いました。「昔は痩せてたんだから平気だつ



て。さとみたいにガリガリじゃあないけどなあ」

幼虫の言葉に、幼虫が加勢しました。「そうそう、二人共スポーツマンだったんだから」

幼虫たちは自身が幼虫だと認めたくないのです。昔は運動していたから消費できていたカロリーを、食欲はそのままに衰えて動かなくなったため太ってしまった。というよくある話なのですが、ぶくぶくと太ってしまった今の自分に向き合うことができていないのです。だから幼虫たちは体重計に乗らないし、「運動部の部長」という名前ばかりの肩書にうつとりとしていて、「烏龍茶」や「ゼロカロリー」に引き込まれてしまうのです。

私と幼虫たちがお互いに病院へ行かないのは、全くもって同じ理由であります。自分の欲が晒されて、まっとうな人間にまっとうな言葉で現実を突きつけられたくないのです。それは「あんなガリガリが部長って」や、「モテるんだから」などじゃいけません。それらはまっとうな人間から放たれた言葉ではないから。そして「お互い様だよ」も、そうで



しよう。

幼虫たちが口々に「昔の自分たち」自慢をし始めてしまうと、それを聞くのも嫌になり、自室に戻りました。幼虫たちが過去の記憶としての自分を大きくみせている間に、私の病院のことなんてどんどん有耶無耶になっていくのです。私の存在さえ薄れてしまう「昔の幼虫たち」をいくら想像しようとも、目の前には幼虫にしか見えない幼虫しかいないのですから、聞いているだけでも苦しいのです。

部屋で「肥満 改善」だとか「痛風 初期症状」を調べているうちにダイエット広告が増え始め、この私がダイエットか。と鼻で笑っていると、部屋の扉がノックされました。

「はい」と言うと言扉が半分だけ開けられ、幼虫の腕がのぞきました。その手に握られているのは、近所のパン屋で売られているカップケーキでありました。

「夜食に食べなよ」と、言うのです。美味しそうだから三人分買ってきたんだ、と。



私は震えそうになる声を抑えて「ありがとう」と言いました。

もう腕だけではどちらの幼虫なのか判別がつかず、声でやつと、ポテトチップスの方だと分かるような腕でした。分かるのです。あの食欲がまだ子のいない若い快活な存在であれば分かるのです。けれどあの幼虫たちは、いくら食べようとも蝶にもサナギにもなれません。

そして、私が本当に恐ろしかったのは、ショッピングモールに内蔵されているパン屋ではなく、大通りに面して店舗を構えているパン屋ということでした。

幼虫は、私の「ありがとう」を聞くと満足そうに扉を閉めました。ああこれの。何が満足なのでしょいか。

私が、部長になっても虚しいのは他にも理由があります。私は、大学にいけないのです。正確に言えば借金をすればいけるのですが、塾にいかず取りつかれたように勉強をして、それで入れたとしても返済が待っていると思えば、そんな気力はございません。



この家には、食欲につき込むお金はあっても、子どもの学費にあてるお金はないのです。なんせあの幼虫たちは「食」以外の幸せをほとんど知りません。だから食に取りつかれているのです。そんな幼虫たちが、子に食以外の幸せを教えられないのは、もう仕方がないことなのです。そう仕方がないこと。そう思っ保つてきたのですが、このカップケーキはほんとうに、ほんとうに苦しかった。

このカップケーキは、幼虫たちにとって「食」の優先順位が上がってしまったことを裏付けます。今までショッピングモールでの買い物の「ついで」だった菓子類は、ついに「そののため」になつてしまいました。もう生活のための買い物ではなく、欲のための買い物なのです。大げさでしょうか。欲に影響を受けてしまった私がこう考えるのは、大げさでしょうか。

だから部長の座が何かに利用できることもないことを、「誰か」は知りません。みな幼虫です。「誰か」だつて、教員というまつとうな存在に指摘されたくないがため



に、ああいう呟き方をしたのですから。うごめいて、逃れ、貪る幼虫なのです。

そうやって考えていると、カップケーキを食べていないのに、気分が悪くなってきたしまいました。欲は蓄積していきます。「こうなりたくない」という欲が私に蓄積しています。一日の蓄積がたまるので、朝は何かを食べられていても夜は受け付けられないのです。私も例外なく幼虫です。自分の中でうごめいています。

そしてそんな日常で、私だけはサナギになれるように願います。蓄えた欲がいつか飛べる翅になれるように願うのです。